夢霧燕の春休み

PANDORA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢霧燕の春休み

【Ｎコード】
Ｎ７２９９Ｎ

【作者名】
ＰＡＮＤＯＲＡ

【あらすじ】
自称『落ちこぼれ』の中学二年生”夢霧燕”の身に起こったさまざまな出来事を淡々と描いてゆきます。
魔法的（ファンタジー）な出来事から、つまらない日常的な出来事までを、今作品の主人公たる”夢霧燕”を語り部として描いてゆくストーリーです。

※この作品は作者の暇潰しです。
本来は掲載するつもりは有りませんでしたが、今執筆している新作の小説が、思いの外執筆が上手く進まないため、急遽、投稿したも

のです。

新作の執筆が進んだ場合、削除しうる可能性も、なきにしもあらず。

夢霧燕の設定

オリジナル主人公設定

名前
夢霧燕（ゆめぎりつばめ）

種族
人間・男性

年齢
１４歳

誕生日
４月８日

血液型
ＡＢ

利き手
両手

外見
茶混じりの黒髪
黄色い目
普段は前髪とフードで目元が隠れている。
細身（筋肉はわりとついている）

周囲には暗いイメージで定着している。

備考

少し落ちこぼれ気味な中学2年生。
とある事情があり、6歳頃からは祖父母に育てられた。
超多趣味な祖父の影響で、武道や古武術などを少しばかりかじっている。
制服の中にフード付きの洋服を着るほどに、フード付きの洋服しか着ない変わりもの。
前髪で目元を隠している理由は色々ある。気の強い人が苦手。

第1話

終業式が終わり、教室で通知表を受け取り、新学期にとクラスが解散して。

僕は家に帰る気にならないので（主に通知表のせい）、学校付近を散歩する。

普通なら友達と仲良く下校なり、部活動に勤しんだりと、学生ならでわの暇潰しの仕方があるのだが…生憎僕には友達と呼べる人は居ないし、部活動も入部していない。

まあそんなわけで、学校付近を散歩して時間を潰す。

――――――

学校付近を一周して、流石に家に帰ろうかなと考え始めて、最寄りのバス停に向かおうとしたところ、僕は彼女達を見かけた。

同じ学年の超有名人達（主に美人で有名）、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、アリサ・バニングス、月村すずか、いつもの5人組が、僕の正面から歩いて来たのである。

いつものように5人で楽しそうにお喋りしながら歩いている。

綺麗な髪。

整った顔だち。
出る所は出て、引っ込む所は引っ込む。
いかにも美人といった感じがする5人組だ。
なかでもフェイト・T・ハラオウンとアリサ・バニングスについては、学年一位と二位を争う程の成績だ。
だからと言って他の3人の成績が悪いわけではなく、寧ろ良い成績だ。
学年末テストにおいては、一位はフェイト・T・ハラオウン、二位はアリサ・バニングスであり、他の3人も上位十位以内に入っている程の成績の持ち主達だ。
因みに僕は下から7番目である。
まったくもって僕と彼女達は、ある意味対極的な存在だ。
この場合、対極的とゆうのは優等生であるか劣等生であるかを示す。
しかし、やはりクラスが違うので、知っていても、見かける事は余り無い。そんな彼女達に、終業式が終わって暫くたった今、こうして偶然見かけた事に対して、ちょとばかしだが驚きを感じる。
まあ、見かけたのは偶然なんだけどね…。
どうやら彼女達は校門から出てきたところらしいが、よくよく考えれば僕は学校付近を一周散歩していたのだから、見かけて不思議と言うほどのことでもないんだけど。
彼女達のほうは、当然の如く、必然の如く、僕には気付く事はない。

お喋りに夢中になっていて、僕の事など視界にすら入っていないようだ。

まあたとえ入っていたとしても、僕と彼女達は、挨拶をするような仲でさえない…所謂、他人というやつだ。

僕のほうも、まるで彼女達に気付いてないかのような素振りで歩き続ける。

あと、お互いにほんの数歩ほど歩けば無事にすれ違うという位置関係になった、その時…

…何の前触れもなく一陣の風が吹いた。

「あ…。」

と、僕は思わず、声を漏らす。

彼女達のスカートが、めくれあがってしまったのだ。

普段の彼女達なら、すぐに反射神経で押さえ込んだはずだろう…。

…いや、わりとすぐに彼女達は動いていた。

だが、少しばかり遅かった。

白、黒、緑、オレンジ、黒。

各彼女達の下着が、一瞬だが、僕には見えてしまった。
まあ、誰がどの色の下着を着けていたかは、プライバシーの保護のため禁句としておく。

普通こういう場合は、目を逸らすべきだということぐらいわかっている。
普段の僕ならそうしていた。
しかし、あまりにも突然のことに反応が出来なかったのだ。

一方、彼女達はというと…

「……」

僕のことを凝視していた…、というより、睨んでいた。
滅茶苦茶に睨んでいた。

そんななか、彼女達の1人、アリサ・バニングスが僕に問い掛けてきた。

「…ねえ…。」

凄い威圧感が伝わってくる。
こんな威圧感、祖父がマジギレしたとき以来だ。
そんな威圧感に気圧されてか、僕は咄嗟に嘘を吐いてしまった。

「み…見ていませんよ。」

明らかに動揺が見られる僕の言動に対し、後ろで構えていた月村すずかは…。

「…ウソ。」

たった一言でぶった切った。

それから少しの間だ、微妙な空気が流れた。

もしこのとき、僕の他にも人が数名でも居たら、こんな空気には成らなかっただろう。

だが残念ながら、今この場にいるのは僕と彼女達だけだ。

暫く微妙な空気が続いた後、彼女達の中の1人が、急に…。

「…けじめ、つけようか。」

物騒なことを言い出した。

言ったのはたぶん八神はやてだと思う。

けじめ？僕にどうしろと？

そんなことを考えていると、さっきまで俯いていたフェイト・T・ハラオウンが話し掛けてきた。

「…本当に、見てませんか…？」

…頬を赤らめながら、言っていい言葉じゃない気がする。
僕が何か、やらしい事をしたみたいじゃないか。

まあ、彼女のそんな問い掛けに対して、僕は平常心を保ちつつ応える。

「うん、何も見てないよ…。」

嘘八百だが…。

そんな僕の応えを彼女、フェイト・T・ハラオウンは…。

「…ウソ、だね。」

バッサリ切り捨てた。

きっと彼女らの中で、僕の株は現在進行形にて大暴落中だろう。
さて、どうしたらいいんだ？
いっそのこと、本当の事を言ったら許してくれるのだろうか。

よし。
もう本当のことを言ってしまえ。そして謝ればいいはずだ。

「え～と…実は、見てしまいました。すいませんでした。」

取り敢えずこんな感じで…。

…？

僕が本当の事を言って謝った次の瞬間、僕の両側の肩に、手が置かれた。

手を置いた本人のアリサ・バニングスは、恐い笑顔で、僕に死刑宣告をしてきた。

「…記憶が無くなるまで私達に殴られるのと、いっそのこと死ぬの、どっちがいい？」

「……選ばなきゃダメかな？」

たかが女性の下着を見てしまったから死ぬ、なんて絶対に嫌だ。かと言って殴られるのも嫌だ。

だが、彼女達から返ってきた言葉は、無情なものだった。

「「「「「ダメ。」」」」」

終わった。

そんな気さえ感じさせる程の空気が僕を取り巻く。

いや、まだ生きのびる手段はある筈だ…。

って、なんで僕は死ぬことを前提に話を進めているんだ？

彼女達にそんなつもりが有るわけないよな。
きっと殴られても1人一発分ぐらいさ…。
どうやら僕は、殴られることに決定したようだ。
「…死ぬのは嫌だし、殴られるくらいなら…。…！？」
「…チッ！」
そう言った瞬間に拳が、僕を目掛けて放たれた。
当たるか当たらないかの瀬戸際で、僕は急に気が変わり、間一髪で避ける。
舌打ちが聞こえたが…空耳だろうか？
「なんで避けるのよ！？」
僕が拳を避けたことに憤慨するアリサ・バニングス。
いやいや、避けるのは当たり前だと思うのは、この場合、間違えだろうか？
それに…
「…痛いの嫌だし。」
「アンタが殴られる方を選んだんでしょうが！」
「そうだったね。でも、痛いの嫌いだし…だからさ。」
「だからなによ…。」

だからさ…
「…ごめんさい。じゃ。僕はこれで。」
最後にもう一度謝り、即座に逃げる。
バスに乗るのは諦める他に無いだろう。
彼女達も、確か同じバスに乗る筈だ。
全身全霊をかけた全力疾走にて、僕はその場を後にする。

「待ちなさい変態！！」
「なのはちゃん、ディバイン・バスターの準備や！」
「ちょっと、それは無理かも…？」
「はやてちゃん、こうなったらラグナロク・ブレイカーです！」
「ナイス提案やリイン。てゆうか出てきたらアカンやろ！？」
「フェイトちゃん、ソニック・ムーヴ…」
「もう諦めとこうよ…。」
後ろのほうから色々聞こえてくるが、この際、気にするだけ無駄だ。
さて、バスに乗らないと、家までどれくらいかかるんだ？

そんなことを気にしながらも、僕は走るのを止めない。
何故か止まったら終わる気がする、色々ないみで。

しかし、このときの僕は想像もしていなかっただろう。
まさかこの春休みと呼ばれる期間中に、彼女達と何度も会うことになるなどとは…。

――――――

家に着くと、祖父が玄関で待ち構えていた。
因みに僕が通う中学校から、僕の自宅玄関先まで、およそ1時間ぐらいかかった。
そんなことよりも、何故に祖父は玄関先で待ち構えているのだろうか？

「ただいま、じーちゃん。」

そんなことを思いながらも、祖父に帰宅を伝える挨拶をする。
そうすると、必然的に祖父の方も挨拶を返す

「おかえり、燕。」

互いに言葉をかわし、家の中に入ってゆく。
玄関で靴を脱ぎ、家にあがると、祖父が話し掛けてきた。

「燕、おぬしに客が来とる。」

ああ、だから…

「玄関に居た理由はそれ？」

そう祖父に問い掛けると、祖父は黙った。

無言の肯定、と言ったところか。

僕もそうなのだが、祖父は人見知りが激しいところがある。

大抵、家に自分の客以外の人がいると、何処かに出掛けるか、家の裏手にある道場に行く。

多分、さっきは玄関で僕の帰りを待っていたのではなく、出掛けようとしていたのだろう。

「僕に客、ねえ。」

それにしても、僕に客人なんて、何年ぶりだろうか？

たしか、最後に客人がきたのは中学1年の頃だと思う。そうなると、約1年ぶりの客人になる。

「燕、儂は道場に行ってくる。」

祖父は伝えたいことだけ言うと、外に出て行ってしまった。

「客人が帰ったら僕も行くから。」

僕の言葉に、祖父は軽く片手を上げて答えた。

祖父を見送った後、僕は客間に向う。
まあ、あまり長く待たせるのは悪いと思ったからだ。
客間へと続く廊下を歩いていると、前から祖母が歩いてきた。
「ばーちゃん、ただいま。」
「おかえりなさい燕♪」
今日は機嫌が良いみたいだ。まあ何時もなのだが。
祖母は何時も機嫌が良い。
いや、いつも機嫌が良い様に振る舞っている。それも体調が悪い時でも、本当は機嫌が悪い時でもだ。まあそんな祖母だからこそ、怒らせると誰よりも恐ろしいと、ここに記しておこう。
「ところでばーちゃん、僕に客人が来ているって、じーちゃんから聞いたんだけど…。」
祖母ならば、お茶ぐらいは出してくれているだろうが。
「え？聞いてないわよそんな事。」
僕の期待とは、斜め下の答えだった。
どうやらじーちゃんは、ばーちゃんに人が来た事を伝えて居なかったようだ。
とゆうか、来客者にじーちゃんが最初に対応するなど、珍しい事も有るんだな…。
「燕、お客さんはいつ頃来たの？」

祖母は本当に何も聞いていないらしい。

「知らない、じーちゃんからは『客人が来ている』、としか言われなかったから。」

「そう…。」

僕の言葉に、短くかつ素っ気なく応える祖母。
きっと祖父が何も伝えていかなかった事を、かなり疑問に感じているのだろう。
実質、祖母は考える素振りをしながら、ブツブツと呟いている。
はたから見れば、ちょっとした変人にも見え無い事も無い。

まあ、そんな事はお構い無しと、僕は思考している祖母を半場無視する様な形で客間に向かう。

これで二度目になるが、あまり長く待たせるのは悪いと思ったからだ。

さて、一年ぶりの客人は、いったいどんな人なのだろうか。
出来れば、饒舌でない事を祈る。
僕は、お喋りなヤツは好きにはなれないから。
大抵こうゆうヤツは、喋っている事と、思っている事が違う事が多いからだ。
だから対応するのが面倒臭い。

まあ、そんな人が僕の客人として家に来るはずはないけど。

そんな事を考えながも、僕は客人が待っているであろう客間に向かう。

祖父は客人にお茶を出したのだろうか？

急に気になったので、台所によってから行く事にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7299n/

夢霧燕の春休み

2010年10月11日22時32分発行